

## 熊本藩と程朱學

教授 山 田 準

足利氏二百年の亂麻は、徳川氏の快刀に因て廓清の功を遂げられぬ。夫の偉人傑士は風雲際會立功策勳の餘地なきを啣ちぬ。是に於てか平和的戰爭は起れり、學術思想界は群雄の輩出と共に急に活機を添へぬ。鎮西の雄鎮九州の大藩たる熊本は、此間に於て如何なる波動を受けぞ。熊本武士は此間に立ち、如何なる功勳を策せぞ。熊本藩と程朱學とは遂に離る可らざる連鎖を施されぬ、とは如何なる情勢の下に發生せしぞ。是れ吾人が本問題の下に聊か管見を吐露せんとする所なり。姑く吾人をし

て中原學界の潮流を述へまめよ。

足利氏二百年、戰雲六十州に漲り、文種纔に五山僧徒の手に一縷の氣息を保ちぬ。天亦漸く下界の擾々に倦めるか、織田信長か今川義元を桶狭間に破りし次年、即永祿四年を以て、藤原惺窩を播磨細河村に生みぬ。徳川氏三百年の學界は、實に此人に因て導かれたり。其論孟集註、學庸章句を得て始て程朱學に歸向せまは、彼が二十八の歳なり。文祿中一たび家康の招に應えて江戸に赴きしも、深く用ひらるゝに及はず、林羅山其門に出て、會々徳川氏廓清の功亦成り、遂に大に用ひられ、子鶴峰、孫鳳岡相繼ぎ、初は講堂を江戸の上野に建て、後昌平阪に徙え、斯の如くえて昌平學校に於ける林家は幕府三百年の學問指針盤たりし。然れども學界の氣運は固より斯かる單調を許さず。羅山が惺窩の門に入りて後るゝ五年、中江藤樹近江に生るゝ我邦の陽明學は斯人に因て開かれたり。藤樹の生に後るゝ十年、山崎闇齋京都に生るゝ程朱學より變えて神道派に走れり。闇齋の生れし次年、熊澤蕃山生れ。三十年後れ、山鹿素行木下順菴生れ。伊藤仁齋亦二子に後るゝと六年に於て生れたり。仁齋初め程朱學を

精研し、後一家學を創め、宋學を以て佛老に浸淫すると稱え、論孟古義を著え、門徒に京都堀川に授  
 く。其子東涯之を承け、古義學若くは堀川學派の勢饒關西を風靡す。仁齋の盛時、蕃山の王學に於け  
 る、素行の兵學に於ける、從遊の徒日に盛なり。無事を希ふ幕府の施政は、端なく二人の平地に波を起  
 さんとするを嫌忌し、之を各地に禁錮せしも、其徒四方に散え、餘饒益盛んに、諸學派黨同異伐、學界  
 の形勢漸く混亂の狀を現はさんとせり。既にして荻生徂徠出で、混亂は益々混亂を重ねぬ。彼は元祿  
 三年に生れ、二十五歳始て門戸を江戸に張れり。當時は程朱學の人たりしが、彼が特絶の天才と、滿腔  
 の英氣は、他の轍を踐み、他の籬下に傍ふて走るを甘せしめず。其文才は李王の古文辭に契合する所  
 あり。是に於て經義を古文辭に求め、心性を斥け、功利を説き、先王の道は詩書禮樂に在りとし、博辯  
 宏學究めざる所なく、曠達豪放區々禮節に拘らず、一時才俊多くは其門に聚り、享保十二年には、謁を  
 將軍吉宗に許され、物氏一流の學靡然とまて海内に波及せり。徂徠の言に曰く、余無他嗜好唯嗜炒豆  
 而詆毀宇内間人物而已と。其の死する日大雪、徂徠臨終に曰く、海内第一流人物物茂卿將隕命、天  
 爲使此世界銀と。彼の眼中古人なく、氣宇一世を睥睨するもの斯の如し。當時關西に在り、隱然彼か  
 勁敵たるもの伊藤東涯となす。東涯にして機山に擬し得べくば、徂徠は優に不識庵たる者なり。堅を  
 振き銳を陷れ、猛進敵を擇ばざる不識菴の英風は、亦之を彼に認め得べければなり。天既に斯人を學  
 界混亂の渦中に生じぬ、其影響豈に僅少にして己まじや。彼已に没するも、其徒服部南廓太宰春臺等  
 重きを一世に成し、享保元文より寶曆明和に及び、前後五六十年、是を物學熾盛の時期とす。徂徠の盛  
 時、竊に其汎濫を憂へ、程朱心性の學を關西の一角に支し者は、大坂の懷德書院なり。書院は中井竹山  
 の父贅菴、同志と幕允を得て創建せる所、事は徂徠の歿前二年に在り。贅菴初め其師三宅萬年を延て

講席を託え、後自ら代れり。常に學者の虛文に驚せ實功を廢するを嫉み、一部之論語、終身用不盡、何必聞多誇博と云へり。藝菴實曆八年に歿し千竹山之に代る、俊厲の氣、篤學の操、一意父師に繼ぎ、曰く天生我於伊藤荻生之後、關異學我職也と。非徵を著して痛く徂徠を攻撃し、時人をして徂徠は夜叉竹山は鐘馗と評せしむるに至る。是に於て程朱の學鬱然關西に振ひ、柴野栗山、西山拙齋、賴春水等、前後大阪に聚りて之を鼓吹え、既に、幕府寛政の改革は松平樂翁公の手に因て行はれ、異學禁止令は栗山等の手に因て布かれ、昌平學校の程朱學に於ける旗幟鮮明林氏の舊に倍え、列藩靡然之に従ふ、是を徳川氏文運趨勢の大略とす。中原の潮流彼か如え、熊本藩の之に對する態度果えて如何。熊本藩は、其祖細川幽齋法印か文武の名將として家を戰國時代に興せしに視て、其淵源淺からざるを知るへし中江熊澤諸氏王學を中原に唱ふるに及び、姚江良知の旨亦直に熊本を襲ひぬ。幕府王學を忌むに及び、寛文九年熊本藩主も亦士人の王學を修むるを禁す。彼の書を以て奇行を以て有名なる北島雪山、夙に王學を崇ひ、乃ち上書えて曰く、臣少治陽明之學、事君父必由於斯、今而棄之、更無事君父之道也、請致爲臣而行と。此時雪山と共に藩籍を脱せしもの十九人、以て王學流傳の一時に盛なりしを察すへし。藩主は斯くして寛文十一年林氏の高足弟子佐藤竹塢を聘して二百石を與へ。翌年林羅山の妻姪林三陽を聘し、越へて四十年又熊谷竹堂を林門に抜き、竹塢の門更に佐藤固菴を出し、凡そ延寶天和より正徳享保に至る五十餘年、林氏の學は熊本藩に全盛を極めぬ。林氏の學固と程朱の學なるも、其實林羅山博學多才徳川氏の施政を修飾せしに本つき、其學風は詩に文に、歴史に群書に、博涉多識を主とし、心性の學仁義の教は急とする所に非ず、從て竹塢竹堂等の熊本に於ける、蓋し亦斯の如きに過ぎざりなり。

熊本藩の材を林門に仰く彼か如し、其れ終に、國駿を産せずて止まんか。曰く何ぞ其れ然らん、延寶元祿の熊本は、果然二人の神駿を産出せり。熊本藩の程朱學は、實に二人に因て光明の寶門を啓かれたり。二人の精神は繼承者其人を得て、優に熊本藩學の骨子を形成せり。二人を誰とかなす、曰く大塚退野、曰く戴慎菴是なり。退野は延寶五年に生れ、徂徠より少き十一歳のみ。其資性聰敏明達なる彼は、到底博覽多識に傾ける林門の學に甘心すべくもあらず。藩法王學を禁せるに拘らず、先づ良知の學に依て身心の安を求めんとせる如き優に彼の性格を見るに足る。後更に程朱學に歸て、遂に一生を心學即ち己の爲にする學に捧げたり。其語錄實に左の如く言へり。

吾廿八より程朱の學に志す、其前陽明の學を信して良知を見るか如くにあり、聖經に引合せて竊に疑を起す。然て自省録を讀み、内々程朱の學の意味を曉り、始て志す候なり。

慎庵は戴孤山の父にて、退野より少きこと十二歳、嘗て江戸に祇役し、文辭を徂徠に問ひしも、其學術に首肯する能はず。退野と相得て兄弟の如く、與に程朱學を修めんことを誓へり。孤山か薩人赤崎彦禮を送れる序は、以て此二偉人か志操源流を知るに足れり。其一節に曰く。

大塚先生奮然興起。乃始專力朱子之學。既得朝鮮退溪李氏所選朱子書節要而讀之。超然有得於心。遂尊信其書如神明云。先子繼興。兄事大塚先生。同心同德。遂大啓斯學。惠我後人。蓋二君之學。宗朱子。而得李氏爲多矣。

嗚呼二人は國駿なり、國產なり。而て其學之を李退溪に得る亦奇ならずや。退溪其れ何人ぞ、曰く姓は李、名は滉、字は景浩、朝鮮眞城の人、門人退溪先生と稱す。明の孝宗弘治十四年朝鮮に生れ、穆宗隆慶四年朝鮮に死す。即ち我元龜元年にして、藤原惺窩の十歳に歿せり。退溪中年官を棄て、

退溪の上に卜居え、朱子全書を讀み、見る所日に精を加ふ、子弟を教ふる一に心術を開明し、氣質を變化するを以て先と爲え、時人東方の朱晦庵を以て目せま云ふ。其著に自省錄、朱子書節要、聖學十圖、文集等あり。退野慎菴の二人は、實に其遺書に依り、海を隔て世を隔て、感發する所ありまなり。以て當時彼等が眼前に蟠れる林門の學は、其名を程朱にするも、いかに程朱の本面目と遠かりしを知るべき。而て退野の程朱學に歸せしは、かの中井養庵が大坂に懷德書院を創建せしに先んずること二十餘年なるを見ば、中原の風運を餘所に見て、竊に立脚の地を心學に認め、學界の潮流に逆ひて、熊本藩の一角に程朱學の新潮流を導きま彼の行爲は、我近世文學史上いかに崇尚すべきものなるやは、學者の輕々看過する能はざる所なり。

二人に依て導かれたる新潮流の尙ぶべき彼の如き。而て當時の熊本藩は未だ之を歡迎する時機に達せざりま。そは内外の事情之を然らめしなり。時に泰平日久しく、天下の諸侯皆奢侈に流れ、國用に窮せり。而て熊本藩は最甚しく、貧乏大名の名は到る處に轟けり、國本已に立たず、文武の學制に振興の氣運を與ふべき餘地なく、百般の行政は從來の軌道を墨守するに過ぎざりし如し。是を内界の事情とす。當時宛も徂徠關東に偏起し、澎湃たる怒濤は中原を席卷して海の四隅に汎濫し、熊本藩も亦許多の徂徠學者を出すに至れり。慎菴の學尙は文を物門に問ひ、藩中第一風流才子たる住江滄浪は、物門に學て傑出の名あり。水足博泉は十六歳にえて書を寄せ經義を質し、徂徠をして東肥の水秀才と嘆稱せしむるに至る。中瀬柯亭、加賀美鶴灘等、世家重臣亦之に傾向する者少からず、殊に秋山玉山と云へる一大家を出しぬ、玉山は慎庵より少き十四歳、享保八年藩主の識拔を以て醫より儒に變し、翌年藩主に扈して東上、林門に學ふこと前後十年、歸て藩中の學門指南を命ぜ

らる。其學は林家の博覽に本つき。其特長なる詩文と其磊落豪宕の氣宇は、寧ろ徂徠學と相近づき、最も人を容れ才を愛し、聲譽隆々一藩を壓す。是れ外界の事情なり。斯く内外の事情に驅られたる退野愼菴は、纔に同志の徒と孤壘を重圍の中に嬰守するに過ぎず。栗崎履齋が其師退野に贈れる書牘は、實に此間の幾微を漏らせるものなり。

私儀も幼少より讀書を好み申候而、聖經を信し申事は、十五六歳より尊信之志御座候、其時分より、何とぞ主君に聖經を勸申度存念にて、妄意に、其手段を工夫仕候事も御座候、此儀は前かど御咄申上候様に覺候、其已後段々御教誨を承申候而、妄意之寸志無益之儀と奉存候、畢竟止道之通塞は、人力にて難成、命數之否泰にて御座候と奉存候に付、急迫之意思も不奉存候云々、

退野が門下壯年の士を訓飭之、其銳進を抑へて隱忍時機を待たしむる衷情亦察すべからずや、而て時機は遂に熟せざり之。愼庵は延享元年其五十六歳を以て没せぬ。退野の哀慟果えて如何ぞや。其祭文に曰く、

嗚呼天何降短于斯文耶。愼菴奚至於不壽耶。道學將誰使之正君德。誰使之盛。後世將誰使之有立。斯民將誰使之無憾耶。若難學辨、孰能繼其志乎。至若愚病。亦孰能爲之弔乎。然則兄之亡曷爲不堪慟哭耶。

又曰く

今也道學四分五裂、晉孟程朱之正統塗于地、兄唯憂之、欲作書辨之、而未起章。抑昔日有欲擢拔者、兄聞之固辭而止焉。近官府有學用之儀而未能。奄一夕而長終。命其如之何。

又曰く

予也。狷介之性、與世不合。中年初聞有古人爲己之學、求友最切矣。然未得其人。唯兄妙年而有志于此學。我尙其不凡。不挾長少而友之。志同心契。所謂大學之道。相與切磋而究之。退而各自脩。期弊而後已矣。兄壯而有進。我老而幾退。豈謂遽棄余而死邪。嗚呼哀哉。

退野時に年已に六十八、唯一の心友を眼前に喪ひ、悵然望を當世に絶らしものあらん。致仕退野と號す、蓋亦此時に係る。其の栗崎履齋に與へ書狀は、彼が晩年の消息を傳ふるものなり。其一節に曰く、

玉山時ヲ得ラレ候ト存候。爲己ノ學ハ、天下寥々タル由、左可有之候、其上ニ徂徠學流行ト承候ヘハ、我輩ハ抱經伏窮山候事、當然ノ勢ニテ御坐候云々。陶齋モ廢學ト承及申候。拟々舊友如此志立不申候事。歎スルニタヘ不申候。是ニヨリテモ慎菴ノ賢益々尊ヒ申候云々、

退野の晩年、同志の友或は死亡或は廢學、孤城落日の下に殘年を送り、居常地下の慎菴を眷々忘るゝ能はざりまもの斯の如し。超へて六年、彼亦七十四の春秋を全うし、亡友を道山に趁ふて長へに瞑しぬ。其人既に亡し。其學亦人と共に、漸盡灰滅に歸すべきか。嗚呼二人の志生前に紕せり。二人の道死後に伸びぬ。誰か知らん二人の五十年來一たび希ふて見るを得ざりま斯道の光輝が。慎菴の孤兒孤山に依て發揮せられんとは。

詩運は沈靜不動のものに非ず。彼の寶曆改革を以て海内に響ける名君靈威公入て藩封を襲ひぬ。諸般革新の政は著々舉行せられ、寶曆五年藩學時習館は創建開校せられ、秋山玉山之が教授たり。實に退野の歿を距る五年のみ。既にえて慎菴の孤兒孤山、秀才を以て遊學を命せらる。時に年二十三、江戸に在る一年、京都に遊ぶ三年、歸て時習館に入り、訓導助教より、玉山に代り教授たり。前後

四十年、藩學の基礎を程朱學に置き。中井竹山の徒と東西相應えて。他學を闢き心學を鼓吹せしは、彼が力なり。彼の學は家學なり。其の江戸に京都に。未だ曾て贊を執り、師に就きしを聞かず。其志は先志を粗述するに在り、其要は他學と戦ひ心學を衛るに在り、白木生に答ふる書、以て彼が生の心事を窺ふべきなり。其略に曰く。

夫孔孟既沒。而先王之道蕪矣。及宋二程子。始得不傳之學於遺經。朱子繼起。上以續先聖孔孟之統。下以啓天下百姓之惑。《中略》我天正慶長之際。有惺窩先生者出。始讀程朱之書而知孔孟之道實在于斯。乃首倡之。海內之士翕然宗之。《中略》洛有伊氏父子。始別關門戶以譏程朱。江都物氏隨而和之。然伊氏父子其人頗謹厚。如夫物氏高論大言。務言先儒。乃謂子思始乖。荀孟匹也。王霸一也。宋儒之禍甚於秦火也。其儉身也。尙曠達而疏禮法其爲學也。事文辭而廢德行。其論治道也。審權謀而略仁義。於是輕浮放蕩之士。簡之而便之。蟻附麀集益張其說。一有忠厚純正者。目之曰道學先生。一有談德性理義者。調之曰頭巾氣。一犬吠虛。萬犬吠聲。遂使海內學者滔々皆是。於是學術大壞。士風靡爛。道之衰廢未有甚於是時也。慤先君子夙志孔孟之道。深信程朱之學。而憂異學之害眞。邪說之亂正也。嘗嘆曰。工欲善其事必先利其器。吾齡雖疆學則未矣。假我數年。將以論著以辨異學之非也。不幸先君子不及下壽而沒。書竟不成。是時慤幼齡不辨菽麥。幸得嚴兄賢執之訓。稍知所向。不至不能讀父書。於是竊憂時學之有弊。傷先志之未遂。不敢自測。心存粗述云々。

祖述なる哉。祖述なる哉。滔々數百言。其旨や正大、其志や純潔、要は祖述に外ならず。崇孟一書、彼が心血の注ぐ所。乃ち亦先志を紹述せしのみ。斯人にきて藩學に長たり、時習館に於ける四十年



の感化其れ如何ぞや。高本紫溟彼の墓に誌して曰く、君爲館職也。老師宿儒大半異學。君周旋其間、未嘗失獨操也。亦以て彼が先志祖述に於ける經營苦心を察すべし。爾來百餘年、藩學と程朱學は嚴密なる連鎖を施され、教授其人に因り、時に寬嚴張弛あるも、未だ嘗て一定の軌道を逸せず。彼が功豈滅す可けんや。以上論議にして其れ大謬なからんか、吾人は言はん、熊本藩程朱學は、退野慎菴に導かれ、孤山に成ると、嗚呼言果して中るや否や。方に大方の教を乞はんのみ。

## 黄金時代と學生

木 南 生

黄金の貴むべきは、貨幣としてこれを使用せしと同時に認識せられたり、社會は幾多の變遷を受け、時代は幾度か風潮を變ぜざるに關らず、黄金の勢力は、滔々として底止する處を知らず、古來幾多の聖賢、幾多の經濟家は、屢黄金を過重する弊害を説けども、社會の傾向は依然とて、年一年より、黄金崇拜の程度を増し、今や崇拜の意味に於ける黄金時代を現出せぬ、昔は人あり、一萬ターレルをアレキザンダー大王に送りて、其の侵略を免れんと乞ひ、容れられずして止みぬ、パルメニヲ之を聞き痛惜えて曰く、余若しアレキザンダーならば、その贈與を受けしならんにと、アレキザンダー之を評えて曰く、余も亦パルメニヲなりしならんには、喜んでこれを受けざるべしと、今や世界を擧げて殆どパルメニヲたらんとす、

黄金を宮女に贈りて、其の國君を左右せしが如きは、屢支那歐洲の天地に行はれざる事實なりと、